

## 忘れられた文庫たち : 中央図書館所蔵幕末明治期漢 学者旧蔵書群

山根, 泰志  
九州大学附属図書館資料整備室図書目録係

<https://doi.org/10.15017/15443>

---

出版情報 : 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2008/2009, pp.27-30, 2009-07. Kyushu University  
Library, Research and Development Division

バージョン :

権利関係 :

# 忘れられた文庫たち

## —中央図書館所蔵幕末明治期漢学者旧蔵書群—

山根 泰志<sup>1</sup>

### <抄録>

本来はまとまったコレクションでありながら、文庫として別置されずに他の資料と混排されたため、忘れられていた幕末明治期漢学者旧蔵書群の概要を報告し、その存在意義と今後の整理方針を述べる。

<キーワード> 個人文庫、樋口和堂、近藤畏斎、西田幹治郎、宗道遥、漢学、儒学

## Forgotten Library Collections

### —Book Collections by Kangaku (Sinology) Scholars Located at Kyushu University Central Library—

YAMANE Yasushi

#### 1. 中央図書館保存書庫排架和漢古書

九州大学中央図書館所蔵の和漢古書は、主に地下保存書庫の和装本書架に排架されており、貴重図書・特殊図書として指定された一部の資料については貴重書庫に排架されている。保存書庫和装本書架には、平戸藩儒楠本碩水の旧蔵書からなる碩水文庫や、東京帝国大学教授萩野由之の旧蔵書からなる萩野文庫など、独自の分類を付与され、文庫としてまとめて排架されている資料もあるが、ほとんどの資料が通常の資料と同じ分類を付与されて混排されている<sup>1</sup>。本館では、これら和漢古書の NACSIS-CAT への目録データ登録を随時進めているが、それら資料一つ一つがどこからどのような経緯で本館に収蔵されるに至ったかは、一見しただけではわからなかったし、それを意識することも少なかった。

本館では、本学が所蔵する貴重資料に関して認識を深めること、図書館職員の専門性を高めることを目的として、2007年10月より貴重文物講習会を毎月開催している。各貴重文物に深く関わった学内外の講師が、その内容や価値、本学が所蔵するに至った経緯等について講義するものである。

2008年6月20日に開催された第9回貴重文物講習会「近世儒学関係諸文庫について」（講師：人文科学研究院柴田篤教授）の後、保存書庫に混排された和漢古書の中に、実は文庫ないし文庫と称すべき規模の漢学者の旧蔵書がいくつも存在することが判明した。貴重文物講習会を契機として、図書館職員が資料の来歴に意識を払うようになったためであり、それが埋もれて

いた貴重文物の発掘に繋がったことは、講習会の成果を端的に示すものだろう。

本稿は、文庫として別置されずに他の資料と混排されたために忘れられていた幕末明治期漢学者旧蔵書群の概要を報告し、その存在意義と今後の整理方針を述べるものである。

#### 2. 各文庫概要

##### 2.1. 樋口和堂旧蔵書

受入日：昭和6年8月31日

数量：購入分 88部 513冊

寄贈分 200部 859冊

計 288部 1372冊

納入者：丸善

寄贈者：樋口正作（真幸次男）

文庫印：なし。寄贈分資料に捺された「樋口正作寄贈」印のみ

八女酒井田の漢学者樋口真幸(1835-1898、号和堂)の旧蔵書。蔵書は経書に留まらず紀行文や兵書等多岐に渡り、伏見版『吾妻鏡』<sup>2</sup>等国書にも見るべきものが多い。久留米藩儒本荘星川(1786-1858)の旧蔵書を多数含む。この昭和6年受入分とは別に、樋口和堂旧蔵の『皇清経解』20函40帙361冊が貴重書庫に別置されているが、ラベルも図書館の印もなく、未受入の状態である。樋口家に伺った所では、樋口正作氏没後の戦中期に再び蔵書を寄贈したとのことであり、その時のものではないかと推測されるが、なぜ受入されなかったのかは不明である。なお、樋口和堂旧蔵書は1905年開館の私立八女郡図書館にも寄贈されている<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> やまね やすし 九州大学附属図書館資料整備室図書目録係 E-mail: saden@lib.kyushu-u.ac.jp

## 2.2. 近藤文庫

受入日・数量：

昭和9年11月15日 357部 2016冊

昭和11年12月5日 13部 186冊

昭和13年3月25日 26部 42冊

計：396部 2244冊

納入者：積文館

文庫印：カードに「近藤文庫」印（昭和11年追加分にはカード裏に「近藤文庫」，昭和13年追加分にはカード裏に「樋口」とあり）。資料にはなし

平戸藩士近藤畏斎(1832-1891)の旧蔵書。畏斎は碩水文庫の旧蔵者楠本碩水(1832-1916)の同庚の親友で、碩水の兄である楠本端山(1828-1883)の妻の兄でもある。碩水文庫同様宋儒性理の書、崎門（山崎闇齋学派）諸儒の著述を中心とする。受入が碩水文庫受入の翌年であることから、碩水文庫同様、端山の孫に当たる楠本正継教授の斡旋で受入れられたものと思われる<sup>4</sup>。

## 2.3. 西田幹治郎旧蔵書

受入日：昭和12年12月6日

数量：413部 1886冊

納入者：西田梓（西田孚嘉吉の婿養子）

文庫印：なし

瀬高の庄屋・漢学者西田幹治郎(1831-1908、号縮堂)の旧蔵書を中心とし、内111部が師である柳川藩儒横地玄蕃助(1796-1875)旧蔵書、内玄蕃助書入本は58部に及ぶ。朱子学の書を中心とするが、医学・兵学の書も多数含まれる。西田孚嘉吉(1865-1937、幹治郎次子)没後、西田幹治郎門下で福岡日日新聞社阿部暢太郎(1884-1966、後に西日本新聞社長、瀬高町長)の斡旋で本館が購入した。

## 2.4. 逍遙文庫

受入日：昭和16年7月1日

数量：458部 2776冊

寄贈者：宗盛一（当時九州水力社員、本学工学部卒）

文庫印：資料に「逍遙文庫 宗盛一氏寄贈」印

修猷館教授宗盛年(1824-1904、号逍遙)の旧蔵書。經史子集を網羅し、亀井昭陽(1773-1836)、原古処(1767-1827)等、福岡を代表する儒者の旧蔵書を含むが、特に秋月党の謀主磯淳(1827-1876)旧蔵善本が多い。

## 3. 忘れられた理由

各文庫の詳細については別途報告する予定だが、量だけ見ても膨大な蔵書であることが了解されるだろう。これほどの文庫でありながら、『九州大学五十年史』学術史下巻第14編附属図書館にも言及されることなく、『九州大学附属図書館要覧』の「学内所蔵主要文庫」欄（2005/2006まで存在）にも掲載されることなく<sup>5</sup>、学内で存在をご存知の方も伺った限りおられなかった。

なぜ忘れ去られてしまったのか。以下の理由が考えられる。

- 1) 分類、排架上で文庫として独立していなかった
- 2) 文庫印が認められるのは近藤文庫と逍遙文庫のみであり、それもカードと資料両方には捺されなかった
- 3) 文庫目録や受入経緯の記録等が作られなかったか或いは残っていなかった
- 4) 受入が帝国大学時代のため、事情を知る教職員がいなくなって久しい
- 5) 研究・影印等で利用されても資料の由来が言及されることがなかった<sup>6</sup>
- 6) 旧蔵者の知名度が低く、彼らを対象とした研究が少なかった
- 7) 資料の来歴についての調査が散発的で網羅的にされることがなかった

帝国大学時代に文庫等のまとまったコレクションが受入れられた際の同時代的記録はほとんど残っていないが、『寄託図書ニ関スル書類』なる帝国大学時代に締結された寄託契約に関わる書類を綴じたものが残っており、当時の受入のあり方を窺う上で参考になる。例えば、大正15年1月20日に締結された廣瀬文庫寄託の契約書では、第二条に「寄託図書ハ廣瀬文庫ト称シ各図書ニ其旨標記ス」とあり、実際廣瀬文庫の資料には「廣瀬文庫」印が捺されている。また、昭和2年10月1日に締結された松濤文庫寄託の契約書では、第三条に「寄託図書ハ松濤文庫ト称シ九州帝国大学法文学部研究室ニ蔵置シ他書トノ混同ヲ避ク」とあり、実際松濤文庫は独自の分類が付与され、混排されずにまとめて排架されている。こうした事項が条件に挙げられるということは、逆に言えば、条件や申し合わせがなければ、文庫印は捺さない、文庫としてまとめて排架しないのが基本であったと考えられる。

同じく帝国大学時代に受入れられ、文庫印を捺されずに混排されたコレクションでも、忘れ去られることがなかった場合もある。例えば、福岡藩士・郷土史家江島茂逸(1842-1912)の自筆稿本・旧蔵書や、秋月藩士・国学者江藤正澄(1836-1912)の自筆稿本集については、展観で資料が展示されたり<sup>7</sup>、個別に調査が行われたりしたため<sup>8</sup>、少なくとも研究者にはその存在が知られていた。しかし、今回判明した文庫群は、その存在が顕在化されるような機会を得ないまま今日に至った。

## 4. 問題点

文庫としての存在が忘れられることによって生じる図書館の問題として以下のことが考えられる。

- 1) 資料の来歴という、書誌学的に極めて基本的な情報を利用者に提供することができない

- 2) 多くの資料の中に埋もれるため、研究に利用されずに死蔵される
- 3) 旧蔵者の名前も表に出ていないため、彼らについて研究する人も気づかない
- 4) 資料の価値・性格に即した整理・保存・提供ができない
- 5) 文庫に付随して寄贈された未受入資料の由来がわからなくなる<sup>9</sup>
- 6) 自館の蔵書に対する認識を誤ってしまう
- 7) 自館の歴史に対する認識を誤ってしまう
- 8) 文庫の受入に尽くした人々の意志を踏みにじる
- 9) 図書館に対する社会的評価・信頼を失う

実際、旧蔵者のご子孫の方が旧蔵書を見ようと本館を訪ねられた折に図書館職員にないと言われたという話をお伺いした。図書館としてあってはならないことであり、自館の蔵書に無知であることがいかに罪深いかということ物語るものである。そしてより恐ろしいことは、これら多くの問題が、深刻な割に目に見えにくいことである。

## 5. 幕末明治期漢学者旧蔵書群の意義

### 5.1. 個人蔵書の保存

個人の蔵書とは、その人の思想・教育研究・社会的立場・生活などが反映されたものであり、旧蔵者その人を表すものといってよい。その意味で、どこの図書館も所蔵しているような珍しくない本であっても、その人が持っていたということで新たな価値を持つ。その上、衣食の料を縮めて収集した本も、本人没後は徐々に散逸していくものであり<sup>10</sup>、個人の蔵書がまとまって保存されるということは奇跡といえる。それだけに、蔵書を散逸させまいとした関係者の意志は尊重されねばならない。

### 5.2. 時代と地域の共通

今まで中央図書館所蔵の儒学関係文庫としては碩水文庫のみが知られていたが、それに今回判明した文庫群が加わることでコレクション全体の価値がさらに高まる。旧蔵者の生年は1824年から1835年の間に収まり、同じ幕末明治という時代の転換期を、同じ九州の地で生きている。しかも、楠本家と近藤家の関係の深さは前述の通りだが、西田幹治郎も息子や門下生を楠本端山・碩水に入門させており、西田家と楠本家も関係が深かった。このように時代と地域が共通し、しかも相互の関係が深い文庫が同じ図書館に収蔵されている意義は大きい。

### 5.3. 蔵書の象徴性

個人の蔵書同様、大学図書館の蔵書もその大学の教育研究の性格や特徴を反映するものである。それ故に、

これまで図書館がどのような資料を収集してきたかを的確に認識しなければ、現在の図書館の性格を把握することも、これからどのような図書館を作っていくべきかという展望を得ることもできない。その点から見ると、変わりゆく時代と一定の緊張関係を保ちながら、九州各地域の知の基盤として多くの有為な人材を育てた漢学者たちの旧蔵書を、九州大学が受入れている意味は大きい。大学と地域社会との連携が叫ばれる中で、今後これらの文庫群が、九州という地域と九州大学とを精神的に結びつけるシンボリックな役割<sup>11</sup>を担うことが期待されるだろう。

## 6. 今後の整理方針

### 6.1. 文庫ラベルの貼付

文庫としての顕在化をはかるなら、混排をやめて別置すべきだが、それを困難にしているのが、帙の問題である。経費節約のためであろうが、同じタイトルの資料が、文庫の別に関わらず同じ帙に収められていることがままある。そのため、文庫別に排架するなら新たに帙を作り直さねばならない。また、混排されている文庫は他にもあるし、キャンパス移転も控えているため、本館のコレクションを今後どのように扱っていくのかを、長期的視野に立つて方針を定めた上で、排架計画を考えねばならないだろう。

そこでまずは各文庫の帙に「近藤文庫」のようなラベルを貼り、一見してどの文庫の資料かわかるようにしている。また、樋口和堂旧蔵書・西田幹治郎旧蔵書のように、文庫印がなかったものも、「樋口文庫」「西田文庫」と名づけ、そのラベルを貼付している。そもそも文庫と称すべき質と量を有しているし、何よりも文庫として扱うことでまた忘れられることのないようにするためである。

### 6.2. 九州大学所蔵コレクション目録データベースの公開

和漢古書の目録データ作成には、書誌学等の高度な専門的技術を求められるため、全ての資料をNACSIS-CATに登録するまでにはかなりの時間を要する。そこで、各文庫の図書原簿のリストにカードの情報を追加した簡易目録<sup>12</sup>を作成し、従来記録資料館所蔵のみ公開していた文庫・文書群等の目録データベースに追加し、2009年3月から新たに「九州大学所蔵コレクション目録データベース」<sup>13</sup>として公開した。これら文庫群の顕在化をはかるとともに、NACSIS-CATへの登録が完了するまでに利用者に目録情報を提供し、かつ目録データ作成の際の参考に供することを目的としている。

### 6.3. 九州大学蔵書印データベースの公開

蔵書印は、所蔵者がその所有を表す目的で収蔵典籍

書画類に押捺したもので、資料の来歴を示す有力な証拠となり、その資料の価値を大きく左右する。本館では和漢古書の目録データ作成の際に蔵書印を注記に入力しているが、積読に時間がかかる上、同じ蔵書印が何度も出ても情報が共有化されていないため、効率的に入力ができないという問題があった。そこで、上記目録データベース作成過程で収集した蔵書印の写真をデータベース化し、2009年3月から「九州大学蔵書印データベース」<sup>14</sup>として公開した。目録データ作成の際の参考に供するだけでなく、本館蔵書の来歴を明らかにし、その奥深さを広く学内外に伝えることを目的としている。

## 7. おわりに

調査を進めていくうちに気づいたことは、本が集められ、それが本館に受入れられるまでに、実に多くの人々が関わっているということである。本を集めた人、蔵書を引き継いだ人、蔵書を守ろうとした人、埋もれている文庫を掘り起こすことは、そうした人々の意志を掘り起こすことでもある。今ここにある資料一つ一つに、多くの人々の意志が宿っていることを感じることで、資料に対する見かたも変わってくると思う。

## 参考文献

- [1] 『稿本八女郡史』福岡県八女郡役所、1917
- [2] 『福岡県碑誌』筑前之部、大道学館、1929
- [3] 『福岡県先賢人名辞典』文照堂、1933
- [4] 渡辺村男『旧柳川藩志』福岡県柳川・山門・三池教育会、1957
- [5] 岡田武彦等編『楠本端山・碩水全集』葦書房、1980
- [6] 西村天因著、菰口治校注『九州の儒者たち：儒学の系譜を訪ねて』海鳥社、1991
- [7] 『佐世保市史』通史編上巻、佐世保市、2002
- [8] 『西田家文書目録』1-3、柳川古文書館、2003-2005

<sup>1</sup> これら混排された資料の中には、天文学者寺尾壽博士の旧蔵書からなる音無文庫や、私立福岡図書館の旧蔵書からなる廣瀬文庫など、文庫として広く認知されているものも含まれている。これら文庫は資料に文庫印が捺されており、受入の際に作成された文庫目録も残っている。

<sup>2</sup> この伏見版『吾妻鏡』は、『九州大学附属図書館要覧』の「学内所蔵主要文庫」欄等では昭和24年に受入された細川文庫の一書として長らく誤って紹介されていた。その誤りは、『九州大学五十年史』学術史下巻第14編附属図書館(九州大学創立五十周年記念会、1967.11)から始まっているようである。

<sup>3</sup> 『八女市史』上巻(八女市、1992)。

<sup>4</sup> 碩水文庫については、柴田篤「碩水文庫余滴：楠本正継教授と九州大学附属図書館」(『中国哲学論集』33、2007)参照。

<sup>5</sup> 『九州帝国大学附属図書館閲覧案内』沿革略(1942)には、当時所蔵していた文庫が掲載されているが、こ

れらの文庫は含まれていない。既に帝国大学時代から利用者への周知が充分ではなかったことを窺わせる。なお、要覧をベースに作成された本館ホームページの「所蔵コレクション」にももちろん掲載されていないが、現在は追加している(2009.6.5現在)。

<sup>6</sup> 例えば、近藤文庫『尚書蔡伝贅説補』は『池田草庵先生著作集』(青谿書院保存会、1981)に、西田幹治郎蔵『仕学斎先生集』は『柳川の漢詩文集』(柳川文化資料集成第五集、柳川市、2009)にそれぞれ影印が掲載されるが、旧蔵者についての言及はない。逍遙文庫『聖歎外書水滸伝記聞』『水滸伝抄解』の影印を掲載する『唐話辞書類集』第二十集(汲古書院、1976)には、「宗盛一氏逍遙文庫が九州帝大に寄贈したもの」という長澤規矩也氏の言及があるが、文庫印から読み取れる知見に過ぎない。

<sup>7</sup> 「第一回中央図書館貴重文物展観目録」(『大学広報』350、1979)。なお、「第十二回中央図書館貴重文物展観目録」(『大学広報』445、1982)によれば、樋口和堂旧蔵『愚問賢註』『桐火桶』も、第12回中央図書館貴重文物展観「歌論書とその周辺：俊頼から幽斎まで」にて展示されているが、なぜか誤って音無文庫の一書とされてしまっている。

<sup>8</sup> 中村譲「ある郷土史家の生涯をたずねて：江島茂逸」(『図書館情報』8(7)、1972)・筑紫豊『秋月が生んだ明治の文化人江藤正澄の面影』(秋月郷土館、1969)。

<sup>9</sup> 図書館では由来の分からない資料が書庫の奥やダンボール箱の中から発見されることがある。備品として受入されていないことが多いため、資料的価値が分からず廃棄される可能性もままある。しかし、本来は文庫等のまとまったコレクションに含まれていたが、資料的性格ないし形態の特殊性等の理由により、整理が先送りされたものが多いようである。例えば支子文庫や濱文庫といった九州大学元教授の旧蔵書にも自筆原稿や講義ノート等の未受入資料が存在する。前述の『皇清経解』もそうした資料の一つだろう。

<sup>10</sup> 膨大な碩水文庫すら「然れども先生歿後は其蔵書次第に散出せるものあり」(「碩水文庫に就て」『碩水文庫目録』1934)と、旧蔵書そのままが残っているわけではない。

<sup>11</sup> 図書館の地域社会におけるシンボリックな役割については根本彰『情報基盤としての図書館』(勁草書房、2002)参照。

<sup>12</sup> 資料現物を確認したものについては、蔵書印、奥書、書入等の情報を追加している。

<sup>13</sup> URL : [http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000002MANULIB](http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002MANULIB)

<sup>14</sup> URL : [http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000002STAMP](http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002STAMP)